

平成三十一年三月十日（日） 午前十一時

会場 石川県立能楽堂

平成三十年度

# 加賀宝生子ども塾発表会

主催 加賀宝生子ども塾運営委員会・金沢市

後援 公益社団法人 金沢能楽会

■加賀宝生子ども塾とは

金沢市指定無形文化財である「加賀宝生」の後継者育成のため、平成十四年度に設立され、月二回二年間のカリキュラムでお稽古に励んでいます。

このたび、平成二十九年度から二年間お稽古に励んできました「狂言教室」第五期生が修了を迎えます。二年間の集大成をご覧ください。

また、平成三十年度に入塾しました「謡・仕舞教室」第九期生は、一年間のお稽古の成果をご披露いたします。「梅鶯会」、「おかし研祐会」は、加賀宝生子ども塾の修了生で引き続きお稽古に励んでいる子どもたちです。それぞれの成果をご鑑賞ください。



# 番組

## 第一部 加賀宝生子ども塾 発表会

(仕舞) 謡・仕舞教室

老<sup>おい</sup>

松<sup>まつ</sup>

深澤 愛里  
菊池 美桜  
高安 美結  
水上 愛粹

地謡

八木 聡琉  
勇崎 春洗  
木村 瑛真  
吉本 颯太  
遠藤 いと  
浅野 寛文  
中沢 円香  
石井 彩花  
勇崎 まあ子  
後石原 れい奈

◆都の者が菅原道真の菩提寺、筑紫の安楽寺に紅梅殿という梅と老松という松を訪ねます。来かかった老人と男が梅と松の徳を物語るうちに姿を消し、夜に入り老松の精が神々しく、御代を寿ぐ舞を舞います。

(狂言) 狂言教室

成<sup>なり</sup>上<sup>あが</sup>り

〈太郎冠者〉 月岡 咲良  
〈主人〉 中園 和花  
〈すっぱ〉 中川 一落

◆主人が太郎冠者を連れてお参りに出かけます。そのすきにすっぱ(詐欺師)に、太刀を青竹とすりかえられます。眠りから目覚めた冠者は、太刀が青竹に成り上がったと主人に報告し、ごまかそうとしますが、叱られます。二人はすっぱを待ち伏せして捕らえようとします。

# 附子

〔太郎冠者〕 舟津光波香  
 〔主人〕 村上 慶至  
 〔次郎冠者〕 大森 花

◆主人は召使いの二人に、用事があつて留守にするが、「附子」には絶対に近寄ることも手に触れてもだめと、念を入れて出かけます。太郎冠者は好奇心から、附子の中身を見たくなり、次郎冠者に協力をさせ、中を見て、あげくは食べてしまいます。そこへ主人が帰つてきました、さて二人の言い訳は…。

## （能）謡・仕舞教室

亀 石井 彩花  
 鶴 中沢 円香  
 皇帝 後石原れい奈  
 勇崎まあ子

# 鶴

# 亀

大臣  
 八木 聡琉  
 勇崎 春洸  
 木村 瑛真  
 吉本 颯太  
 遠藤 いと  
 浅野 寛文

大鼓 飯嶋六之佐  
 小鼓 住駒 幸英  
 太鼓 麦谷 暁夫  
 笛 室石 和夫

後見 藪 俊彦  
 松田 若子

地謡  
 深澤 愛里  
 菊池 美桜  
 高安 美結  
 水上 愛粹

◆唐（中国）の都で、年の初めに、宮殿での正月の儀式のため、皇帝が不老門に現れると、参内した人々は、天に響くほどの祝賀の声をあげます。宮庭は金銀珠玉で飾られ、仙人が住む蓬莱山と変わらぬ美しさです。鶴と亀がめでたい舞を舞うと、皇帝も喜び、自らも国の繁栄を願つて舞います。

盆<sup>ぼん</sup>

山<sup>さん</sup>

〈盗人〉坂本 巴菜  
〈主人〉坂本鼓太郎

◆盆山（盆の上に、石や砂で山などをかたどった置物）を沢山持っている男（主人）に、男（盗人）が何度頼んでもひとつもくれないので、ある日盗みにやってきました。垣根を破って忍び込み、盆山を物色しているうちに、主人に見つかってしまいます。盆山の陰に隠れた男に対し、主人はしばらく盗人をからかってやろうと、あれは犬だ、猿だなどと言い、盗人はその度に鳴きまねをしますが、鯛だと言われて…。

## 第二部 梅鶯会・おかし研祐会 発表会

(連 吟) 梅鶯会

鶴つる 亀かめ

梅鶯会 全員

◆能「鶴亀」の皇帝の登場から始まり、宮廷の美しい庭の様子が謡われる場面までを、全員で謡います。

(狂 言) おかし研祐会

痺しびり

〈太郎冠者〉山形 光駈  
〈主人〉水野 千絵

◆ある主人が、今晩急にお客を家に呼び、ご馳走することになり、太郎冠者を呼び出して和泉の堺(現在の大阪府堺市)へ行つてご馳走用の「肴(さかな)」「料理に使う材料全般」を求めて来るようにと言いつけます。面倒に思った太郎冠者は、自分には親譲りのひどい「しびり(痺れ)」の病があつて行くことが出来ませんと、仮病を使います。仮病を見抜いた主人は、何とかして使に行かせるために太郎冠者をやり込めようと思つますが…。

(仕 舞) 梅鶯会

高たか 砂さご

瀉瀨 遥翔

◆肥後国阿蘇宮の神主友成は、播磨国高砂の松の根方を清める老人夫婦と言葉を交わし、松のめでたい謂れを聞きます。二人は高砂住之江の相生の松の精と明かし、住吉で待つと言いついて、小舟に乗つて去ります。後を追つた友成は、住吉明神が出現して春景色を賞し、御代を祝つて神舞を舞う姿を見ます。(傍線部の仕舞をします)

竹生島 ちくぶしま

深澤 芯太

◆琵琶湖に浮かぶ竹生島には、弁財天が祀られています。その湖水には、弁財天の使者である龍神が棲んでいます。醍醐天皇に仕える臣下が参詣すると、光り輝く弁財天が現れました。一方、湖上には金銀珠玉を持った龍神が現れ、猛々しく舞い、「人々を苦しみから救い、国土を鎮め護る」と誓い竜宮へ入つてしまわれました。(傍線部の仕舞をします)

(狂言) おかし研祐会

犬山伏 いぬやまぶし

〈山伏〉 柏野 夏月  
〈僧〉 村濱 美音  
〈茶屋〉 朝日 理櫻  
〈犬〉 山形 光駈

◆僧侶が本当に弱々しいか、または山伏を見下したふうにしやあしやあとしているかで、ずいぶん雰囲気が変わる曲です。犬は着ぐるみに頭巾、けんとかの面を着け、びょうびょうと鳴いて出てきます。僧侶と山伏が相祈りをし、犬がどちらになつくかと勝負をします。

(仕舞) 梅鶯会

八島 やしま

赤坂 美紬

◆源平の戦の折り、源義経は八島での船戦で活躍しました。義経は、実は自らの弓を波に流され、ある理由から必死の思いで拾い上げたというエピソードを語ります。後半、修羅道に堕ちたその霊が現れ、平家の武将を相手に戦う有様を再現します。やがて夜明けの朝風と共に消え失せるのでした。(傍線部の仕舞をします)

殺生石

守田 希海

◆那須の原に、生き物全てに害を及ぼす石があり、殺生石として怖れられていました。実際には周囲に有毒な火山性ガスが噴出していたためですが、古くは全て石に取り憑いた妖怪の仕業と思われていました。帝の窮地を救うべく、勇敢な二人の男がこの妖怪に立ち向かい、遂に退治しましたが、那須を訪ねた僧の前で、妖怪はその有様を自ら再現して見せました。僧の御法の後は、二度と悪事を働かないと誓い、石に戻りました。(傍線部の仕舞をします)

(狂言) おかし研祐会

伯母ケ酒

〈甥〉 瀬川 温仁  
〈酒屋〉 水野 千絵

◆面を小道具として扱う演技は、能には見られず、狂言独特のもので。鬼の面をつけて伯母をおどして酒を飲みますが、飲みすぎて、寝てしまい、伯母に見つかり、酔っぱらって逃げて行きます。まだ子どもにはふさわしくない演目ですが、どのように見られるでしょうか…。

(仕舞) 梅鶯会

鶴亀

角目 良生

◆能「鶴亀」の最後の場面です。臣下や庭に棲む鶴や亀に祝われた皇帝が、玉座から立ち上がり、自ら舞を舞います。臣下を始め国の人々は、世の中の平和を喜び、皇帝は長生殿に戻られました。(傍線部の仕舞をします)



猩しょう

々じょう

櫻井直太朗

◆中国、揚子江のほとりに住む高風は親孝行の徳があり、不思議な夢のお告げ通り、市場で酒を売ると繁盛し裕福になりました。毎日、酒をたくさん飲むが全く顔色の変わらない不思議な客がいるので、その素性を尋ねたところ、海中に住む猩々であるといつて立ち去りました。驚いた高風が川のほとりに酒壺を供えて夜もすがら待っている、猩々が現れ、酒の徳を讃え、高風と酒を酌み交わしました。猩々は興に乗じて舞を舞い酔い臥し、汲めども尽きぬ酒壺を残し置いて、再び海中に帰っていきました。(傍線部の仕舞をします)

(狂言) おかし研祐会

佐渡狐さどきつね

〈佐渡の国のお百姓〉 氷見有寿加  
〈越後の国のお百姓〉 宮本 晴奈  
〈お奏者〉 立石 唯人

◆佐渡の国と越後の国のお百姓が、道づれになり、話合っているうちに、佐渡には狐がいらないと言われます。佐渡のお百姓はたくさんいると言ひ、賭けをします。賄賂を文字どおり、お奏者(役人)に袖の下にすべりこませ勝とうとしますが…。